

【研究ノート】

「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

福田 千鶴

はじめに

田安德川家とは、八代將軍徳川吉宗の次男宗武が享保十六年（一七三二）に創設した家で、田安・一橋（吉宗四男宗尹が創設）・清水（九代將軍徳川家重の次男重好が創設）の三家をあわせて三卿と称された。初代当主となる田安德川宗武は、正徳五年（一七一五）十一月二十七日に紀伊徳川家の赤坂屋敷に誕生し、翌六年十月十八日に江戸城本丸に入った。享保十年七月二十九日に二の丸に移り、同十六年正月二十七日に田安門内に屋敷地一万九百三十三坪を拝領し、同年九月二十三日に田安屋形に移って独立家となった。

本稿で主に取り扱う「諸家系譜」^①八には、宗武から嫡子治察（一七五三～一七七四）、その死亡後に田安家を再興することになった斉匡（一橋徳川治済五男、一七七九～一八四八）、さらに婿養子齊莊（^{なりたか}十一代將軍徳川家齊十三男、一八〇九～一八四五）の女子二人の代までの履歴が記されている。男性の記述も詳細ながら、女性の履歴がこれほど詳細に記載された系譜も珍しい。そこで本稿では、「諸家系譜」八に記載された田安德川家の女性の履歴から、近世後期の女性の人生儀礼についてのモノグラフを提示したい。

大名家の生活についての先行研究では、松尾美恵子・藤實久美子編『大名の江戸暮らし事典』^②があり、本稿でも参照させていただいた。とくに第六章なかで武家の女性の人生儀礼が取り上げられている。ただし、章題が「当主と人生儀礼」とあるように、大名当主の事例解説に比重が置かれて

いる。その点でも、武家の女性に焦点を絞り、その人生儀礼のモノグラフを提示する意義は十分に認められよう。

そこで、表1には、「諸家系譜」八に掲載された田安德川家の女性の履歴を掲示した。それらを比較しつつ、第一章では誕生から成人まで、第二章では婚姻の手続き、第三章では妻となつてから死ぬまでの人生儀礼につき、基本事項を確定していきたい。^③

一、誕生から成人まで

八代將軍徳川吉宗の次男宗武は、享保二十年（一七三五）十二月十八日に近衛家久の娘久子（知・森・通）と婚姻した。久子は元文五年（一七四〇）に最初の子を流産したが、その後は長女誠（^{のぶ}次女裕（早世）、長男小次郎（早世）、次男鉄之助（早世）、三女貞（^{てい}稚・仲）、五男寿麻呂（治察）、四女節が生まれた。つまり、嫡出子は四女三男の計七人である。^④

庶出子は、まず山村氏から三女淑（^{すえ}三男友菊（早世）、六男豊麻呂（定国）、七男賢麻呂（定信）、七女種（^{たね}八女定の三女三男の計六人が生まれた。このほか、毛利氏から四男乙菊（早世）、林氏から六女脩（^{やす}が生まれた。よつて、庶出子は四女四男の計八人である。宗武の子は、全部で女子八人、男子七人の計十五人となる。

宗武は明和八年（一七七二）六月四日に五十七歳で没した。同年七月三日に嫡出五男の治察が家督を継いだ、無嗣のまま安永三年（一七七四）九月八日に二十二歳で没した。以後は、男性当主不在のまま、宝蓮院と名

表1 田安德川家女性の履歴一覧

順	年月日	西暦	年齢	履歴
0	近衛久子（知・森・通）			父：近衛家久、母：桂岩院、田安德川宗武本妻
	享保六年九月十五日	1721	1	御誕生
	享保十八年八月十三日	1733	13	御発途
	享保十八年八月二十八日	1733	13	御下向、二丸被為入、御迎秀小路
	享保十九年六月二十三日	1734	14	一位様を被仰入二付御縁組
	享保二十年二月二十八日	1735	15	御結納
	享保二十年七月十二日	1735	15	御手当御米五百俵・御金三千両被進、外式百俵
	享保二十年十一月二十五日	1735	15	公方様を御守刀三原代金十枚・御壺八重垣・御伽羅五百目被進、御使大久保下野守
	享保二十年十二月十八日	1735	15	御婚礼
	享保二十年十二月二十三日	1735	15	御婚礼後、二丸被為入
	元文二年十一月十八日	1737	17	竹千代様初御対顔
	元文三年五月七日	1738	18	御有卦入
	元文四年六月十四日	1739	19	通姫卜御改
	元文五年四月十九日	1740	20	御袖留、御褊 一位様を被進之
	元文五年四月二十一日	1740	20	御流産
	寛保元年二月二十三日	1741	21	御着帯、七月二十一日誠姫様御誕生、八月十一日御枕直
	寛保三年	1743	23	御着帯、九月廿日裕姫様御誕生、十月十一日同断
	延享元年九月廿五日	1744	24	淑姫様御養
	延享二年五月六日	1745	25	御着帯、十月朔日小次郎様御誕生、十月廿二日御枕直
	延享二年十二月四日	1745	25	御無卦入
	延享三年正月廿五日	1746	26	御代替後、御本丸、誠姫様・淑姫様同断、二月七日御移徙後西丸
	延享四年三月十九日	1747	27	初而箱崎御屋敷被為入、御子様方御同道
	延享四年四月廿三日	1747	27	御着帯、八月二十四日鉄之助様御誕生
	寛延三年五月廿九日	1750	30	御有卦入
	宝暦元年三月十五日	1751	31	御着帯、六月十三日貞姫様御誕生
	宝暦三年四月十五日	1753	33	御着帯、十月七日寿丸様御誕生、七月廿七日御枕直
	宝暦六年	1756	36	御着帯、六月十九日節姫様御誕生、七月十一日御枕直
	宝暦六年三月廿二日	1756	36	西丸御簾中様御緋帯御上ケ
	宝暦七年十二月十一日	1757	37	御無卦入
	宝暦十二年二月廿一日	1762	42	田安御焼失、御本丸被為入
	宝暦十二年三月十五日	1762	42	四谷御屋敷御移
	宝暦十二年五月十八日	1762	42	御有卦入
	宝暦十二年九月廿九日	1762	42	万寿姫君様（家治次女）御髪置之節、御白髪御上ケ
	宝暦十二年十一月十九日	1762	42	田安御移
	宝暦十三年三月二日	1763	43	御実母桂岩院死、廿日申来
	宝暦十三年七月朔日	1763	43	脩姫様・豊丸様・賢丸様御養
	明和三年九月四日	1766	46	種姫様御養、御届
	明和六年九月五日	1769	49	定姫様御養
	明和八年六月十一日	1771	51	御門主様を御法号被進奉宝蓮院
	安永四年四月廿九日	1775	55	有徳院様（徳川吉宗）・心観院様（徳川家治本妻）御霊前御唐所并凌雲院御手前御霊前御参詣被成候、初テ也、
	安永四年十月九日	1775	55	芝淳信院様（徳川家定）・天英院様（徳川家宣本妻）御参詣
	安永六年三月九日	1777	57	定姫様御同道にて奥御能
	安永六年四月二日	1777	57	凌雲院御参詣
	安永六年十二月十一日	1777	57	田安御焼失、御本丸被為入、同七年十二月十三日田安御移
	安永六年十二月十八日	1777	57	四谷御屋敷御移
	安永八年十月十八日	1779	59	奥御能御見物、定姫様御同道
	安永九年十一月十二日	1780	60	六十御賀

【研究ノート】「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

	天明三年二月十七日	1783	62	上野御参詣
	天明三年四月十八日	1783	62	奥御能御見物、定姫様御同道
	天明五年二月四日	1785	65	上野御参詣
	天明六年正月四日	1786	66	御所勞
	天明六年正月十二日	1786	66	午刻御逝去、御年六十六、御法名惺池覚棲
	天明六年正月廿五日	1786	66	未刻御出棺、上野凌雲院御葬
1	誠（ノフ）、延			父：田安德川宗武、母：近衛久子
	寛保元年七月二十一日	1741	1	御誕生
	寛保元年七月廿七日	1741	1	御七夜、御名拝領、御着添、女使
	寛保元年十一月十一日	1741	1	御色直
	寛保二年正月十二日	1742	2	山王御宮参、御本丸御立寄
	寛保二年二月六日	1742	2	西丸江登城、右大将様へ初テ
	寛保三年六月廿五日	1743	3	御髪置、御白髪堀川兵部大輔広益妻（万里中納言妹ナリ）上之
	寛延二年十一月十五日	1749	9	御紐解
	宝暦元年十二月八日	1751	11	松平陸奥守惣領藤次郎（重村）へ御縁組被遊可然旨、御本丸老女瀧津の申来
	宝暦元年十二月十日	1751	11	御縁組被成度御西伺、高井兵部少輔江御家老兩人口上にて申上
	宝暦元年十二月十一日	1751	11	御縁組之儀申上候処、一段之御縁組と被思召候、御勝手次第御取組被成候様被仰出旨同人申来候、
	宝暦二年三月朔日	1752	12	松平陸奥守宗村嫡藤次郎（重村）縁組被仰出、上使本多伯耆守正珍・松平右近将監武元
	宝暦二年四月廿三日	1752	12	陸奥守田安江参上
	宝暦二年十一月十一日	1752	12	御麻疹御酒湯
	宝暦三年六月朔日	1753	13	御鉄漿初、姫君様の御道具
	宝暦三年七月廿五日	1753	13	有卦入
	宝暦五年十一月十九日	1755	15	御結納
	宝暦七年十一月廿二日	1757	17	御抱瘡御治定、十二月五日御酒湯
	宝暦八年九月六日	1758	18	九月御婚姻御治定
	宝暦九年五月六日	1759	19	延姫卜御改、三月十五日御金五千両
	宝暦九年五月十二日	1759	19	四時御卒去、御年十九、御法名直譽知董誠圓、号慧学院
	宝暦九年五月十八日	1759	19	小石川伝通院江御葬
2	裕			父：田安德川宗武、母：近衛久子
	寛保三年九月廿日	1743	1	誕生
	寛保三年九月廿六日	1743	1	御七夜
	寛保三年十一月十六日	1743	1	丑刻御早世、御法号随縁院幻夢空寂
	寛保三年十一月十八日	1743	1	上野凌雲院御葬
3	淑（スエ）			父：田安德川宗武、母：山村氏
	延享元年六月廿九日	1744	1	御誕生
	延享元年七月六日	1744	1	御七夜
	延享元年九月廿五日	1744	1	御簾中様御養、御届
	延享元年九月廿六日	1744	1	山王御宮参、御本丸御立寄
	延享二年九月廿五日	1745	2	西丸
	延享三年九月二十二日	1746	3	御髪置、御白髪竹本茂兵衛妻上ル
	寛延三年三月廿三日	1750	7	御抱瘡、四月五日御酒湯
	寛延三年十一月十五日	1750	7	御紐解
	宝暦六年十二月十三日	1756	13	御鉄水初、御道具尾州姫君様の被進之
	宝暦十二年九月十三日	1762	19	御縁組御内伺済
	宝暦十二年九月廿七日	1762	19	松平信濃守重茂御縁組、上使酒井左衛門尉忠寄・松平右京大夫輝高を以、十二月十五日御金五千両
	宝暦十二年十二月廿九日	1762	19	御結納
	宝暦十三年正月廿三日	1763	20	御婚礼、御輿送松平掃部頭勝長
	宝暦十三年正月廿九日	1763	20	御里披、御袖留無之、
	宝暦十三年五月十五日	1763	20	御婚礼後、初登城

	明和七年閏六月十日	1770	27	信濃守卒去後、廿三日申来、七月十二日円諦院卜御改
	安永元年二月廿九日	1772	29	御屋敷類焼、田安屋敷へ御立退
	安永元年五月廿六日	1772	29	故信濃守妾腹於数方養
	安永元年十二月十九日	1772	29	溜池屋敷御移徙
	文化三年七月廿七日	1806	63	御剃髪
	文化十二年九月廿六日	1815	72	夜亥刻御卒去、年七十二、御道号本誉曜和貞隠大禪定尼
4	貞（テイ）、稚（ツネ）、仲			父：田安德川宗武、母：近衛久子
	宝暦元年六月十三日	1751	1	夜ハツ時御誕生
	宝暦元年十一月廿五日	1751	1	御色直・御箸初
	宝暦三年五月廿七日	1753	3	山王御宮参、御式 御名代
	宝暦三年五月廿七日	1753	3	御髪置
	宝暦四年十一月朔日	1754	4	山王御参詣
	宝暦五年正月廿三日	1755	5	初而御本丸
	宝暦七年十一月十五日	1757	7	御紐解
	宝暦十三年正月十八日	1763	13	稚姫様御改
	宝暦十三年十一月廿五日	1763	13	御鉄漿初
	明和四年五月十六日	1767	17	御縁組御内伺済
	明和四年五月廿三日	1767	17	松平相模守重寛御縁組、上使松平右近将監・松平周防守、七月八日御金五千両、外五千両御拝借
	明和四年十二月朔日	1767	17	仲姫様御改
	明和四年十二月十三日	1767	17	御結納
	明和五年二月七日	1768	18	御婚礼
	明和五年二月十三日	1768	18	御膝直
	明和七年十二月三日	1770	20	御袖留
	安永三年二月十五日	1774	24	御着帯
	安永三年六月十七日	1774	24	御女子御出生 八十姫
	安永四年十二月十九日	1775	25	妾腹鶴五郎養、十一歳
	安永五年四月	1776	26	麻疹
	安永八年六月二日	1779	29	刻上刻御卒去、年廿九、御法名聖諦院義範如證
	安永八年六月十三日	1779	29	牛嶋弘福寺御葬送、御忌日追而五月廿一日二相改候、
5	節（トキ）			父：田安德川宗武、母：近衛久子
	宝暦六年六月十九日	1756	1	御誕生
	宝暦六年六月廿五日	1756	1	御色直・御七夜
	宝暦六年九月廿九日	1756	1	山王御宮参、一橋御殿御立寄
	宝暦六年十一月十五日	1756	1	御箸初
	宝暦七年正月十三日	1757	2	御本丸初御登城
	宝暦八年九月十一日	1758	3	御髪置
	宝暦九年正月十六日	1759	4	御抱瘡、廿七日御酒湯
	宝暦十年十月十三日	1760	5	御縁組御内伺済
	宝暦十一年六月四日	1761	6	松平岩之丞(毛利治元) 殿御縁組、上使秋元但馬守・井上河内守
	宝暦十二年十二月十五日	1762	7	御紐解
	明和五年十一月一日	1768	13	御鉄漿初
	明和八年十一月廿八日	1771	16	御金五千両
	明和八年十二月七日	1771	16	御結納
	明和八年十二月十八日	1771	16	御入輿御婚礼
	明和八年十二月廿三日	1771	16	御里披
	明和八年十二月廿八日	1771	16	御礼
	安永元年二月廿九日	1772	17	類焼、田安御立退
	安永三年二月	1774	19	水痘
	安永五年四月	1776	21	麻疹、五月九日酒湯

【研究ノート】「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

	安永六年五月十一日	1777	22	山王参詣
	安永六年十月四日	1777	22	有徳院様・心観院様并凌雲院へ参詣
	安永七年正月廿三日	1778	23	御着帯
	安永七年正月廿七日	1778	23	御袖留
	安永七年六月五日	1778	23	御女子御出生
	安永七年九月廿九日	1778	23	大膳大夫殿願二付、節姫様を宝蓮院様へ御願被成、宝蓮院様へ公方様御筆之絵御拝領
	天明元年正月十五日	1781	26	御着帯
	天明元年閏五月三日	1781	26	御女子御出生
	寛政三年六月廿一日	1791	36	大膳大夫卒後、邦媛院卜御改、哲之進・儼之進養
	寛政六年正月十日	1794	39	御住居類焼
	寛政七年四月九日	1795	40	移徙
	寛政十二年三月五日	1800	45	熱海湯治発足、四月十四日帰
	文化二年九月廿七日	1805	50	五十之御賀
	文化六年十一月九日	1809	54	麻布屋敷引移
	文化十二年六月四日	1815	60	御卒去、御年六十、御道号寿山展興
	文化十二年六月十三日	1815	60	貝塚青松寺御葬
6	脩（ヤヲ）			父：田安德川宗武、母：林氏
	宝暦六年十月十七日	1756	1	御誕生、御祝十八日
	宝暦六年十月廿三日	1756	1	御七夜、御色直御祝兼と相見へ候
	宝暦七年四月朔日	1757	2	御髪置、御箸初御内祝
	宝暦九年正月中	1759	4	御疱瘡
	宝暦十年四月三日	1760	5	御弘メ
	宝暦十二年十二月廿三日	1762	7	御紐解
	宝暦十三年七月朔日	1763	8	御簾中様御養、御順豊丸様（定国）之上
	明和四年八月四日	1767	12	酒井左衛門尉忠徳御縁組、上使松平右京大夫・松平周防守
	明和五年十二月十三日	1768	13	御鉄漿初
	安永二年八月十八日	1773	18	御金五千両
	安永二年八月廿五日	1773	18	山王御参詣
	安永二年九月十八日	1773	18	御結納
	安永二年十一月廿五日	1773	18	御引移
	安永二年十二月朔日	1773	18	御婚礼
	安永二年十二月七日	1773	18	御里披
	安永五年六月四日	1776	21	麻疹
	天明元年六月廿三日	1781	26	御袖留
	天明七年六月	1787	32	妾腹女子お建養
	文化四年三月廿六日	1807	52	柳原屋敷引移
	文化九年九月廿五日	1812	57	右兵衛佐卒後、仙寿院卜御改
	文政三年正月八日	1820	65	卒去、年六十四、法号照誉珠光智静
	文政三年正月十九日	1820	65	増上寺塔頭清光寺葬
7	種（フサ）			父：田安德川宗武、母：山村氏
	明和二年七月十五日	1765	1	御誕生
	明和二年七月二十三日	1765	1	御七夜・御色直兼
	明和二年十一月十五日	1765	1	御箸始
	明和三年九月十五日	1766	2	御簾中様御養
	明和三年十一月廿七日	1766	2	御髪置、御内々御祝
	明和五年九月廿三日	1768	4	山王御宮参、一橋御殿御立寄
	明和八年十二月十三日	1771	7	御紐解
	安永三年十二月十六日	1774	10	種（タネ）姫卜御改
	安永四年十月廿九日	1775	11	御養女御内意

	安永四年十一月朔日	1775	11	公方様御養女 上使松平右京大夫
	安永四年十一月七日	1775	11	御本丸被為入
	天明七年十一月廿七日	1787	23	嫁紀伊徳川治宝
	寛政六年正月八日	1794	30	卒
8	定			父：田安德川宗武、母：山村氏
	明和四年二月五日	1767	1	御誕生
	明和四年二月十一日	1767	1	御七夜・御色直
	明和五年九月廿三日	1768	2	山王御宮参、一橋御殿御立寄
	明和六年九月五日	1769	3	御簾中様御養
	明和六年九月六日	1769	3	御髪置
	明和六年十二月廿四日	1769	3	於義丸（越前松平治好）殿御縁組之儀、常磐橋〆御請被仰上
	明和八年十二月十九日	1771	5	松平於義丸殿御縁組 松平右京大夫・板倉佐渡守
	安永二年十一月朔日	1773	7	御紐解
	安永六年十二月十一日	1777	11	田安御焼失、御本丸
	安永六年十二月十八日	1777	11	四谷御屋敷
	安永七年十二月十三日	1778	12	田安江御移
	安永八年十二月十三日	1779	13	御鉄漿初
	天明六年正月十八日	1786	20	宝蓮院（近衛久子）様御逝去二付御本丸へ御越候様 周防守殿
	天明七年五月六日	1787	21	引取願済
	天明七年五月廿一日	1787	21	御金五千両被進
	天明七年六月五日	1787	21	御結納
	天明七年六月十五日	1787	21	霊岸嶋御引移
	天明七年六月廿三日	1787	21	御婚礼
	天明八年二月廿三日	1788	22	御袖留・着帯
	天明八年六月廿三日	1788	22	御廣方出生
	寛政元年四月廿一日	1789	23	疱瘡、五月二日酒湯、日数七日祝有
	寛政元年八月廿三日	1789	23	御膝直
	寛政二年十一月十九日	1790	24	御義丸殿出生
	寛政七年八月十六日	1795	29	常磐橋引移
	寛政七年十二月十五日	1795	29	御台様御着帯二付御緞帯献上
	享和二年正月	1802	36	住居焼失
	文化三年三月四日	1806	40	類焼、霊岸嶋立退
	文化四年七月廿八日	1807	41	常磐橋引移式、十一月十九日引移
	文化九年四月三日	1812	46	仁之助殿養
	文化十年正月八日	1813	47	卯上刻卒去、年四十七、御法名麗照院柔誉貞相固順
	文化十年正月十九日	1813	47	西久保天徳寺御葬
0	裕宮貞子			父：閑院宮美仁親王、母：近衛内前娘、田安德川齊荘の本妻
	天明二年	1782	1	御誕生
	寛政五年十二月十六日	1793	12	御縁組
	寛政七年九月二十八日	1795	14	御首途、十月十六日御発駕、一条殿御逝去二付廿三日二成
	寛政七年十一月十三日	1795	14	御下向、御迎常磐井、表使沢田
	寛政七年十一月十八日	1795	14	田安御移
	寛政七年十一月廿一日	1795	14	御結納
	寛政七年十一月廿七日	1795	14	御婚礼
	寛政八年正月十五日	1796	15	年始并御膝直兼、御本丸
	寛政九年十二月五日	1797	16	不時御登城
	寛政十一年十月十五日	1799	18	不時御登城
	寛政十二年正月廿三日	1800	19	御袖留、御着帯
	寛政十二年五月廿一日	1800	19	御産、近姫様御誕生

【研究ノート】「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

	寛政十二年五月廿三日	1800	19	御水痘御届、六月朔日御酒湯、十一日御枕直
	享和元年三月九日	1801	20	不時御登城
	享和二年八月廿三日	1802	21	御着帯
	享和三年正月八日	1803	22	静姫様御誕生、廿九日御枕直
	文化四年四月十五日	1807	26	不時御登城
	文化四年七月廿八日	1807	26	御着帯御内祝
	文化四年十二月廿一日	1807	26	猶姫様御誕生、文化五年正月十一日御枕直
	文化十年八月四日	1813	32	西丸御簾中様江御繰御上ケ
	文化十四年十二月十一日	1814	36	御無卦入
	文政元年十月六日	1818	37	御父閑院宮薨、十二日申来、廿九日御忌解
	文政四年五月廿四日	1821	40	御所労、御床上ケ
	文政五年五月九日	1822	41	御有卦入
	文政八年九月廿九日	1825	44	御逝去、御年四十四、御法号無量院真寿見阿
	文政八年十月八日	1825	44	御葬
	文政九年八月晦日	1826	45	御宝塔供養
1	近			父：田安德川齊匡、母：裕宮貞子
	寛政十二年五月廿一日	1800	1	午中刻御誕生
	寛政十二年五月廿七日	1800	1	従 公方様以女使御名御拝領
	寛政十二年六月七日	1800	1	御七夜祝儀、十一日御三七夜
	寛政十二年九月廿九日	1800	1	御色直、御箸初
	享和元年三月廿三日	1801	2	山王御宮参、御本丸御立寄
	享和二年九月廿三日	1802	3	御髪置、御白髪従御本丸御拝領
	文化元年正月十一日	1804	5	御袍瘡、廿一日御酒湯
	文化二年十一月十九日	1805	6	此御方御縁組、上使牧野備前守・土井大炊頭
	文化三年十二月二日	1806	7	御紐解
	文化九年十一月廿一日	1812	13	御鉄漿初
	文化十一年十月朔日	1814	15	御引移付、御金五千両外、御拝借金
	文化十二年正月廿五日	1815	16	御結納被為請
	文化十二年十一月廿三日	1815	16	神田橋江御逗留
	文政二年四月五日	1819	20	御婚礼
	文政五年三月十三日	1822	23	御袖留
	文政七年五月	1824	27	御麻疹
	天保元年四月廿二日	1830	31	御逝去、御歳三十一、御法号薇光院、凌雲院御葬
2	包（カネ）			父：田安德川齊匡、母：寛氏
	寛政十二年八月廿六日	1800	1	昼八時御誕生、御届廿七日
	寛政十二年九月三日	1800	1	御七夜、御簾中様御養
	寛政十二年十二月廿八日	1800	1	御色直
	享和元年三月廿三日	1801	2	山王御宮参、御本丸御立寄
	享和元年七月十六日	1801	2	御早世、御年二才、御法名瑤温院理乗純圓
	享和元年七月十九日	1801	2	凌雲院御葬
3	静（キヨ）			父：田安德川齊匡、母：裕宮貞子
	享和三年正月八日	1803	1	御誕生
	享和三年正月十四日	1803	1	御七夜
	享和三年四月十八日	1803	1	御色直・御箸初
	享和三年六月廿三日	1803	1	御卒去、御法名宝光院蓮心清影
	享和三年六月廿五日	1803	1	未刻、凌雲院御葬
4	鐸（ヨリ）			父：田安德川齊匡、母：八木氏
	文化二年九月十八日	1805	1	昼八時半御誕生
	文化二年九月廿九日	1805	1	御七夜・御色直、御簾中様御養

	文化三年二月二日	1806	2	御簪初
	文化四年三月十一日	1807	3	山王御宮参、一橋御殿御立寄
	文化四年九月十一日	1807	3	御髪置
	文化八年十一月十九日	1811	7	御紐解
	文化十年五月九日	1813	9	御縁組御内伺済、十九日御願備前殿へ出
	文化十年五月廿三日	1813	9	松平常四郎定通御縁組、上使松平伊豆守・青山下野守
	文化十五年正月廿九日	1818	14	御庖瘡、二月九日御酒湯、御祝者二月廿三日
	文政二年正月十八日	1819	15	御結納
	文政二年十二月廿三日	1819	15	御引移、御婚礼
	文政七年四月三日	1824	20	御麻疹、御酒湯
	文政十一年十一月十五日	1828	24	御袖留
	天保六年六月廿四日	1835	31	貞寿院卜御改（六月四日定通没）
	天保十一年九月十九日	1840	36	三田屋敷引移
	万延元年八月十一日	1860	56	卒、葬于三田済海寺
5	某			父：田安德川齐匡、母：河合氏
	文化四年十月十日	1807	1	七半時御誕生、夜四半時御早世、御法名理照院顕了住圓
	文化四年十月十二日	1807	1	凌雲院御葬
6	鋭（エツ）			父：田安德川齐匡、母：斎藤氏
	文化四年十一月七日	1807	1	御誕生
	文化四年十一月十三日	1807	1	御七夜、御簾中様御養
	文化六年十一月十八日	1809	3	御髪置
	文化七年九月十九日	1810	4	山王御宮参、神田橋御立寄
	文化九年三月廿八日	1812	6	御本丸初登城
	文化十年十一月十五日	1813	7	御紐解
	文化十一年	1814	8	御内伺済
	文化十一年十二月十一日	1814	8	津軽雅之助（信順）江御縁組、上使牧野備前守・青山下野守
	文政二年十一月十五日	1819	13	御鉄漿始
	文政三年正月	1820	14	御庖瘡 十四日御酒湯
	文政三年十二月十七日	1820	14	御葬去、十四歳、御法号縁理院心鑑本明
	文政三年十二月廿二日	1820	14	上野凌雲院御葬
7	猶（ユウ、友子）			父：田安德川齐匡、母：裕宮貞子
	文化四年十二月廿一日	1807	1	御誕生
	文化四年十二月廿七日	1807	1	御七夜、御色直兼
	文化六年十一月十八日	1809	3	御髪置
	文化七年九月十九日	1810	4	山王御宮参、神田橋御立寄
	文化九年三月廿八日	1812	6	御本丸登城
	文化十年十一月十五日	1813	7	御紐解
	文化十年十二月廿五日	1813	7	要之丞様（家斉十三男）御縁組、御順近姫様御次、鐙姫様御上
	文化十五年二月朔日	1818	12	御庖瘡 十三日御酒湯、御祝者二月廿三日
	文政二年十一月十五日	1819	13	御鉄漿始、一橋御簾中様ヨリ御鉄漿始筆
	文政六年六月十一日	1823	17	御無卦入
	文政七年四月三日	1824	18	麻疹酒湯
	文政九年二月十一日	1826	20	御結納
	文政九年二月十八日	1826	20	御婚礼
	文政九年二月廿七日	1826	20	年始御振合御登城
	文政十一年四月十三日	1828	22	戸山
	天保二年四月十三日	1831	25	御袖留
	天保七年八月廿一日	1836	30	御簾中様卜称
	天保十年五月三日	1839	33	市谷御屋形御引移

【研究ノート】「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

	弘化二年七月廿一日	1845	39	貞慎院様卜称
	明治五年二月廿二日	1872	66	卒、葬于尾州名古屋建中寺
8	鐙			父：田安德川齊匡、母：八木氏
	文化五年閏六月六日	1808	1	御誕生
	文化五年閏六月十三日	1808	1	御七夜、御簾中様御養
	文化七年十一月十五日	1810	3	御髪置
	文化九年三月十五日	1812	5	山王御宮参、神田橋御立寄
	文化十年九月廿二日	1813	6	御縁組御内伺済、廿三日御願大炊頭へ出
	文化十年九月廿八日	1813	6	酒井小五郎（忠発）へ御縁組、上使松平伊豆守・牧野備前守
	文化十一年十一月十五日	1814	7	御紐解
	文政元年二月七日	1818	11	御抱瘡、御弘無之、
	文政三年十一月廿八日	1820	13	御鉄水始
	文政七年	1824	17	御内々御麻疹
	文政八年八月六日	1825	18	御有卦入
	文政十一年正月廿三日	1828	21	御結納
	文政十一年十一月廿五日	1828	21	柳原屋敷御逗留
	文政十二年六月廿三日	1829	22	御婚礼
	天保三年十一月朔日	1832	25	御袖留
	天保十三年四月十五日	1842	35	神田橋屋敷御引移
	嘉永元年二月四日	1848	41	酒井長次郎養
9	欽（ヤス）、後金			父：田安德川齊匡、母：斎藤氏
	文化六年五月十六日	1809	1	四半時過御誕生
	文化六年七月廿三日	1809	1	御七夜・御色直、御簾中様御養
	文化八年十一月十九日	1811	3	御髪置
	文化九年三月十五日	1812	4	山王御宮参、神田橋御立寄
	文化十二年十二月朔日	1815	7	御紐解
	文化十四年三月十八日	1817	9	抱瘡内々酒湯
	文政四年三月	1821	13	津軽大隅守（信順）御縁組内伺済
	文政四年四月廿七日	1821	13	御縁組 上使土井大炊頭・大久保加賀守
	文政五年十一月十五日	1822	14	御結納
	文政七年	1824	16	御内々御麻疹
	文政八年五月六日	1825	17	御有卦入
	文政九年十一月廿三日	1826	18	御引移御婚礼
	文政十一年二月廿日	1828	20	暁御住居焼失、田安御退
	文政十一年八月廿四日	1828	20	本所仮御住居御帰
	天保十一年十一月朔日	1840	32	金姫卜御改
	嘉永四年九月十四日	1851	43	卒、謚仙桜院、葬于東叡山中津梁院
10	猗（ヨシ）			父：田安德川齊匡、母：篠崎氏
	文化八年三月十三日	1811	1	夜四半過御誕生
	文化八年三月十九日	1811	1	御七夜、御簾中様御養
	文化八年七月廿三日	1811	1	御簪初
	文化十年六月十六日	1813	3	御縁組御内伺済、廿四日御願出
	文化十年六月二十八日	1813	3	松平永太郎（定和）江御縁組 上使松平伊豆守・牧野備前守
	文化十年十一月十五日	1813	3	御髪置
	文化十一年三月十九日	1814	4	御宮参、一橋御屋形御立寄
	文化十三年十一月廿八日	1816	6	築地楽翁殿住居御逗留
	文化十四年五月廿九日	1817	7	御卒去、御年十七、御法号浄潭院普見覺影
	文化十四年六月四日	1817	7	築地御出棺、凌雲院御葬送

11	恒（ヒサ）、永			父：田安德川齊匡、母：高月氏
	文化十二年四月十九日	1815	1	生
	文化十四年十二月十五日	1817	3	御弘メ
	文化十四年十二月十八日	1817	3	髪置内祝、同日御簾中様御養
	文政二年正月廿五日	1819	5	恒（ヒサノ）姫御改
	文政二年十二月十五日	1819	5	疱瘡
	文政二年十二月廿三日	1819	5	御逝去、御年五、号麗容院体仁含章
	文政二年十二月廿六日	1819	5	御葬送
12	歳（セイ）			父：田安德川齊匡、母：高月氏
	文化十三年十二月十七日	1816	1	御誕生
	文化十五年二月廿九日	1818	3	御疱瘡、表向無之
	文化十五年三月八日	1818	3	卒、三歳、号善地院了現順行
13	三千			父：田安德川齊匡、母：篠崎氏
	文化十五年三月廿七日	1818	1	生
	文政三年正月八日	1820	3	御卒去、耀光院真性圓淳
14	愛（アイ）			父：田安德川齊匡、母：八木氏
	文政元年十二月廿一日	1818	1	生
	文政三年十一月廿八日	1820	3	御髪置
	文政四年正月廿五日	1821	4	御弘、御届
	文政五年二月廿三日	1822	5	御宮参、一橋御立寄
	文政五年五月九日	1822	5	御有卦入
	文政五年九月二日	1822	5	直七郎（尾張徳川齊温）様御縁組、青山下野・阿部備中守
	文政五年九月九日	1822	5	御順、猶姫様御次
	文政七年	1824	7	御内々御麻疹
	文政八年二月二日	1825	8	御紐解
	文政九年十一月廿一日	1826	9	御結納
	文政十年十一月廿三日	1827	10	市谷（尾張邸）御引移
	文政十一年十一月十一日	1828	11	御婚礼
	天保元年十月十一日	1830	13	御登城
	天保二年十一月十一日	1831	14	御鉄漿初
	天保三年十二月七日	1832	15	御逝去、御法号琮樹院、十五歳
	天保三年十二月廿日	1832	15	西久保天徳寺御葬
15	千重			父：田安德川齊匡、母：篠崎氏
	文政四年三月十四日	1821	1	生
	文政七年	1824	4	御内々御麻疹
	文政八年二月朔日	1825	5	御丈夫御届
	文政八年二月五日	1825	5	御簾中様御養
	文政八年十二月十三日	1825	5	御疱瘡治定
	文政十年十二月朔日	1827	7	紐解
	文政十二年三月廿九日	1829	9	御宮参、一橋御屋形御立寄
	天保五年二月五日	1834	14	御鉄漿初
	天保七年十一月二日	1836	16	神田橋御逗留、同十年田安へ御帰殿
	天保十三年四月廿九日	1842	22	松平右近将監（鶴田武成）御縁組
	弘化二年九月廿七日	1845	25	御結納
	弘化二年十二月十八日	1845	25	御婚礼
	弘化四年十一月廿八日	1847	27	右近将監卒去及永寿院御改
	万延元年正月七日	1860	40	卒、葬于谷中善性寺
16	純			父：田安德川齊匡、母：高月氏
	文政四年五月十八日	1821	1	生

【研究ノート】「諸家系譜」にみえる田安德川家女性の人生儀礼

	文政七年	1824	4	御内々御麻疹
	文政八年二月朔日	1825	5	御丈夫御届
	文政八年二月五日	1825	5	御簾中様御養
	文政九年正月七日	1826	6	御抱瘡御治定、十六日御酒湯
	文政十年十二月朔日	1827	7	御紐解
	文政十二年三月廿九日	1829	9	御宮参、一橋御屋形御立寄
	天保五年二月五日	1834	14	御鉄漿初
	天保七年十一月二日	1836	16	神田橋御屋敷御逗留
	天保十年	1839	19	田安へ御帰殿
	弘化三年十二月廿七日	1846	26	立花次郎（鑑寛）御縁組
	弘化四年七月廿五日	1847	27	御結納
	弘化四年十一月廿二日	1847	27	御婚礼
	嘉永四年三月十六日	1851	31	袖留
17	弥			父：田安德川齊匡、母：高月氏
	文政六年四月十六日	1823	1	生
	文政九年正月十二日	1826	4	御卒去、四才、号円証院真善寂妙
18	至（ムネ）			父：徳川齊匡、母：木村氏
	文政八年十一月三日	1825	1	生
	文政九年八月十六日	1826	2	卒、号寂照院理明善達、二才
19	筆			父：田安德川齊匡、母：木村氏
	天保元年七月廿三日	1830	1	生
	天保三年十一月十五日	1832	3	御髪置
	天保七年三月	1836	7	抱瘡
	天保七年八月六日	1836	7	丈夫届
	天保七年十二月廿三日	1836	7	御紐解
	天保八年十一月二日	1837	8	御宮参
	天保十三年十一月廿三日	1842	13	御鉄漿初
	弘化四年十一月十二日	1847	18	松平肥前（鍋島斉正）へ縁組
	弘化四年十二月九日	1847	18	結納
	弘化四年十二月廿三日	1847	18	御移
	嘉永二年十二月廿三日	1849	20	婚礼
1	勝			父：田安德川齊莊、母：笹本氏
	天保三年四月廿三日	1832	1	生
	天保三年四月廿八日	1832	1	名拝領
	天保四年七月十八日	1833	2	夭、二才、号瑤理院玉香妙性
2	利			父：田安德川齊莊、母：宮田氏
	天保七年六月廿八日	1836	1	生
	天保七年七月五日	1836	1	名拝領
	天保七年十一月廿一日	1836	1	御色直・御箸初
	天保九年十二月五日	1838	3	御髪置、御白髪大御台様より
	天保十年五月三日	1839	4	市谷（尾張邸）御引移

註1)「諸家系譜」八から作成した。年月日には干支が併記されているが、削除した。履歴は記載通りとしたが、事典等により()内を補ったものがある。

註2) 網掛けの記事は『徳川諸家系譜』三所収「田安德川家記系譜」から補った。

註3) 順の0は妻、1以降は娘の出生順を指す。なお、男子の出生は含まない。

を変えた久子が後家となつて田安德川家を守っていた。ところが、天明六年（一七八六）正月十二日に久子が没すると、翌七年六月に斉匡（一橋徳川治済の三男）が田安德川家の家督を継ぐことになった。

斉匡は、寛政七年（一七九五）十一月二十七日に裕宮貞子（父は閑院宮美仁親王、母は近衛内前の娘）と婚姻した。貞子からは、長女近、三女静（早世）、七女猶の三女が生まれた。男子の出生はない。よつて、嫡出子は三女のみである。

庶出子は、寛氏から長男剛之丞（早世）・次女包、斎藤氏から次男益千代（匡時）・六女鋭・九女欽（金）、八木氏から四女鏐・八女鏐・十四女愛・六男房之助（慶寿）・七男総之助（早世）、河合氏から五女某（早世）、四男謙三郎（早世）、高月氏から十一女恒（永）・十二女歳・五男郁之助（斉位）・十六女純・十七女弥・八男郁之助（早世）、篠崎氏から十女猗・十三女三千・十五女千重・九男群之助（慶頼）、木村氏から十八女至・九男錦之丞（慶永）十九女筆・十男鑑麻呂（慶歳）が生まれた。よつて、庶出子は十六女・十男の計二十六人である。斉匡の子は、全部で十九女・十男となる。右のうち、次女以下は行事が省略されたり、行事があつたとしても記事が省略されたりする傾向がみられるので、本章では宗武の嫡出長女として生まれた誠を基本モデルとして取り上げ、他の女子との比較を行い、基本事項を確定していくことにしたい。

①誕生（一歳）

出生は「御誕生」と記されるが、斉匡十一女からは単に「生」と記された。誠の出生に際しては、墓目役と竹刀役が任命された。通例では、これに矢取役が加わる。宗武庶出三女淑の記述では、魔除けの儀礼である墓目・矢取役、出産に際して必要な竹刀を進上する担当者が書かれているので、誠の場合も矢取役の任命があつたと考えられる。

②七夜（一歳）

出生して七日目に、七夜の祝儀があり、名づけが行われる。誠は、將軍

から女使をもつて「御名」を拝領した。同じ嫡出子でも、次女と四女にはそのような記述はない。斉匡の嫡出長女の場合も、七夜に將軍より女使をもつて「御名」を拝領した。この場合も、嫡出次女以下にはそのような記述はない。將軍からの実名拝領という名譽を記載漏れすることは考えにくいので、実名拝領は田安德川家の嫡出長女に与えられた特権とみなされよう。

なお、斉匡は文化十年（一八一三）十二月二十五日に斉莊（十一代將軍徳川家斉の十三男）を養子に迎えた。斉莊には二人の庶出女子（勝・利）が生まれており、いずれも名の拝領があつた。これは血縁では、將軍家斉の孫娘にあたるからだろう。

③色直・箸初（一歳）

誕生して百一日目に、白色の衣服から色のある衣服に着替える。誠の場合は、日取り通りに色直が実施されている。宗武の嫡出次女裕は早世。庶出三女淑は記載がなく不明。嫡出四女貞は七夜の記述がなく、五か月後に色直と箸初が同時に行われ、嫡出五女節は七夜の日に色直も行われ、五か月後に箸初があつた。庶出六女脩と庶出七女種は、やはり七夜の日に色直があつた。このように、嫡庶にかかわらず、次女以下は一歳に行われる七夜・色直・箸初が同時に行われたり、あるいは行事自体が省略されたりした。右の傾向は、斉匡の娘たちにおいても確認できる。

④宮参り

誕生後、男子は三十二日目、女子は三十三日目に産土に社参するとされるが、田安德川家では宮参りの時期は一定していない。誠の場合は、誕生後約六か月後となっている。これは次に述べるように、本丸登城と運動するため、日程調整等の事情で延引した可能性がある。産土は、全員、山王社に宮参りをしたが、宗武嫡出四女貞は名代派遣で済ませている。

⑤本丸登城

誠は、山王社への宮参り後に、江戸城本丸へ登城した。「江戸幕府日記」(国立公文書館蔵、以下同じ)寛保二年(一七四二)正月十二日条には、次のようにある。

一、誠姫今日宮参相済、御本丸大奥江罷上、

但、右二付御取かハシ等有之、

卷物三 加藤甲斐守

右誠姫宮参り、初而 御本丸江供仕候ニ付被下之、

右於土圭間中務大輔申渡之、不及列座、

「諸家系譜」では単に本丸登城となっていたが、登城場所は本丸大奥であったことが確定する。よって、以下本丸登城とあっても、これは大奥への登城と考えられる。翌日には、宗武(「右衛門督」)が登城し、本丸奥にある笹之間で老中本多中務大輔忠良に昨日の礼を述べた。将軍家斉より祝儀を贈られ、田安へは渋谷和泉守良信(側衆)、山王社へは大島近江守以興(小納戸頭取)が使者として派遣された。

同年二月六日に誠は西の丸に登城し、世子家重(「右大将」)に初めて対面した。これ以外で誠が江戸城に登城した記録は確認できない^①。

宗武庶出三女淑は、三か月後に宮参りとなった。その前日に本妻の養いとなつて届が出されており、宮参り後に本丸に立ち寄った。嫡出四女貞は三歳で宮参りとなったが、名代派遣であり、四歳時に山王社に参詣し、その三か月後に本丸登城となった。嫡出五女節は、誕生から三か月後に宮参りをしたのち一橋邸を訪ねており、本丸初登城は翌年となっている。六女から八女は庶出子のためか、誕生後の本丸登城はない。

ただし、庶出七女種は十一歳の時に十代将軍家治の養女となり、本丸大奥に入つて育てられ、天明七年(一七八七)に紀伊徳川治宝に嫁ぐまで大奥で過ごした。庶出八女定は、安永六年(一七七七)と同八年、天明三年に嫡母近衛久子(宝蓮院)に連れられて江戸城本丸奥で催された能を観た(近衛久子の履歴参照)。安永六年十二月に田安邸が焼失すると、嫡母とともに本丸に退去している。また、天明六年に嫡母が没すると江戸城本丸に

引き取られ、越前松平治好に嫁ぐまで本丸で過ごした。

斉匡の嫡出長女近は、二歳で山王社に宮参りをした後、本丸に登城した。庶出次女包も、二歳で宮参り後に本丸に登城した。これは誕生時に出生届が出され、七夜に斉匡本妻の養いとなつており、嫡出子の扱いとなったことによる。嫡出三女静は早世、庶出四女鏑は三歳で宮参り後に一橋邸に立ち寄った。本丸登城は記録されていない。庶出五女は早世、庶出六女鋭は四歳で宮参り後に一橋邸(神田橋)に立ち寄り、六歳で本丸に初登城した。いずれも七夜に本妻と養子縁組をし、嫡出子の扱いになっていた。嫡出七女猶は、四歳で宮参り後に一橋邸に立ち寄り、五歳で本丸に初登城した。八女以下の庶出女子は、本丸登城の記事がみられなくなる。

⑥髪置(三歳)

幼児が頭髪を初めて伸ばす時にする儀式で、武家・民間では三歳の十一月十五日にすることが多いとされる。誠は、寛保三年(一七四三)六月二十五日に髪置の祝儀があつた。三歳ではあるが、十一月十五日ではない。年齢では、宗武庶出六女脩と同庶出七女種が二歳で髪置をしたが、他はみな三歳で行つた。十一月十五日に髪置をしたのは斉匡庶出八女鏑、同庶出十女猶と同庶出十九女筆の三例に過ぎず、いずれもまちまちである。誠には、白髪を高家堀川(有馬)兵部大輔広益の妻(万里小路中納言妹)が進上した。他の娘にも白髪の進上があつたと思われるが、記載はほとんど省略されている。

⑦紐解(七歳)

幼児がそれまでの付け帯をとり、初めて普通の帯を付ける祝儀である。女子は七歳の時に行うとされるが、誠の場合は九歳なので二年遅い。ただし、斉匡庶出十四女愛が八歳で紐解をした以外は、全員、七歳となっているので、誠の場合は何らかの事情で九歳に遅れたものと推察される。

なお、娘二十九人のうち、十一人が七歳以下で早世した。よって、七歳までの生存率は六十二パーセントとなる。

表2 麻疹罹患記事一覧

番号	父	出生順	年齢	罹患年月日	病名
1	宗武	1	12	宝暦二年十一月十一日	御麻疹御酒湯
2	宗武	4	26	安永五年四月	麻疹
3	宗武	5	21	安永五年四月	麻疹、五月九日酒湯
4	宗武	6	21	安永五年六月四日	麻疹
5	斉匡	1	27	文政七年五月	御麻疹
6	斉匡	4	20	文政七四月三日	御麻疹、御酒湯
7	斉匡	7	18	文政七年四月三日	麻疹酒湯
8	斉匡	8	17	文政七年	御内々御麻疹
9	斉匡	9	16	文政七年	御内々御麻疹
10	斉匡	14	7	文政七年	御内々御麻疹
11	斉匡	15	4	文政七年	御内々御麻疹
12	斉匡	16	4	文政七年	御内々御麻疹

⑧鉄漿初（十三歳）

初めて鉄漿をつける儀式であり、これをもって女子は成人となる。斉匡庶出十四・十五・十六女が十四歳で行った他は、いずれも十三歳で一定している。

⑨麻疹・疱瘡・水痘

麻疹は二歳から五歳の幼児が罹りやすいウィルス性の病気とされるが、表2の十二例のうち、五歳以下で罹患したのは二例に過ぎない。安永五年（一七七六）に三人と文政七年（一八二四）に八人が一度に罹患した。最高齢は二十七歳である。年齢に関わらず、麻疹が流行した年に罹患する傾向がわかる。

表3 疱瘡罹患記事一覧

順番	父	出生順	年齢	罹患年月日	病名
1	宗武	3	7	寛延三年三月廿三日	御疱瘡、四月五日御酒湯
2	宗武	5	4	宝暦九年正月十六日	御疱瘡、廿七日御酒湯
3	宗武	6	4	宝暦九年正月中	御疱瘡
4	斉匡	1	5	文化元年正月十一日	御疱瘡、廿一日御酒湯
5	斉匡	4	14	文化十五年正月廿九日	御疱瘡、二月九日御酒湯、御祝者二月廿三日
6	斉匡	6	14	文政三年正月	御疱瘡 十四日御酒湯
7	斉匡	7	12	文化十五年二月朔日	御疱瘡 十三日御酒湯、御祝者二月廿三日
8	斉匡	8	11	文政元年二月七日	御疱瘡、御弘無之、
9	斉匡	9	9	文化十四年三月十八日	疱瘡内々酒湯
10	斉匡	11	5	文政二年十二月十五日	疱瘡
11	斉匡	12	3	文化十五年二月廿九日	御疱瘡、表向無之
12	斉匡	15	5	文政八年十二月十三日	御疱瘡治定
13	斉匡	16	6	文政九年正月七日	御疱瘡御治定、十六日御酒湯
14	斉匡	19	7	天保七年三月	疱瘡

一方、疱瘡の十四例（表3）はいずれも二十歳未満で罹患しており、年齢の近い姉妹が同時に罹患した例もあるが、特定の年に流行するといった傾向はみられない。

麻疹・疱瘡の他では、宗武嫡出五女節は、安永三年（一七七四）二月に十九歳で水痘に罹った。寛政十二年（一八〇〇）五月二十三日には、裕宮貞子が十九歳で水痘に罹ったことが届けられ、六月一日に酒湯、十一日枕直となっている。他の娘も水痘に罹ったのかもしれないが、記述は省略されている。

罹患すると表向に報告されるが、庶出子になると報告されず、内々の扱いとなった。斉匡庶出十二女歳は、三歳で疱瘡に罹り、表向への報告はなく、そのまま没した。いずれも快復すると、酒湯の祝儀があった。

⑩ 弘めと養い

嫡出女子の場合は、出生と同時にその披露（「弘め」）があった。嫡出長女の場合は、將軍から名を拝領するので、すぐに届けが出された。「江戸幕府日記」が残る例で確認すると、斉匡嫡出長女近の場合は、誕生当日の「江戸幕府日記」寛政十二年五月二十一日条に次のようにある。

一、右衛門督殿御簾中御出産、御女子御出生、

また、斉匡嫡出三女静が誕生した「江戸幕府日記」享和三年正月八日条には、次のようにある。

一、右衛門督殿御簾中御出産女子出生二付、為御歛、

公方様 大納言様

御台様より女中 御使被遣之、

一、右二付老中・若年寄中、御側衆を以、恐悦申上之、西丸江者不相越、右にあるように、本妻（「御簾中」）の出産は慶事（「御歛」）であり、將軍・世嗣・御台所より使者が田安德川家に派遣された。同時に老中・若年寄が側衆をもって將軍に「恐悦」を言上した。

一方、翌日正月九日条には、次のようにある。

一、右衛門督殿産穢、民部卿殿差留二付登 城無之、

出産は慶事であるとともに、産穢が発生するため、登城差し控えとなる。その意味でも、出産の有無は届け出る必要があった。

宗武庶出三女淑は七夜で本妻の養いとなり、届けが出された。出生順の早い子は七夜に養いとなる例が多く、斉匡の場合は庶出十女までが七夜に本妻の養いとなった。その後は、成長の見通しが立った段階、あるいは婚礼時期が近付いた段階で、表向きに弘めがあり嫡母の養いとなって親類づきあいが始まり、贈答の対象となり、家族の中での席順が決められた。さらに月番老中に丈夫届が提出され、公的に認知された。

本妻の養いとなれば、嫡出子と変わらない待遇が与えられた。とくに宗武庶出七女種は注目される。種は二歳で本妻の養いとなり、十一歳で將軍家治の養女となって江戸城本丸大奥に入り、「種姫」から「種姫君」に呼称を変え、家治の「御部屋様」より席順は上となった。二十三歳で紀伊徳

川治室に嫁ぐ際に、紀伊家では種の扱いを「姫君様」とするか、紀伊徳川家の妻の格式である「御簾中並」とするかを問い合わせ、「姫君様」の格とする旨の返答を受けた。つまり、紀伊徳川家本妻の通常の格式である「御簾中」ではなく、それより高い「姫君様」（將軍家出身の娘）の格式の扱いのままとすることになった。田安德川家における生母の出自による嫡庶の差は、まったく影響を与えなかったとわかる。

以上のように、女子の場合は本妻の養いとなることで、嫡庶の差はほとんどなくなるというよう。子が少ない段階では七夜に嫡母の養いとなるが、子が増えてくると、成長の見通しが立った段階、あるいは婚礼時期が近付いた段階で嫡母の養いとなる傾向にある。なお、斉匡庶出十九女筆は誕生時にすでに裕宮貞子が没していたため養いとなっていないが、七歳で痘瘡を終えたのちに丈夫届が出され、十八歳で鍋島斉正との縁組が取り決められ、二十歳で婚姻となった。これをみれば、近世後期に本妻の養いとなることは表向きのことであり、本妻不在の場合でも丈夫届を出すことで子として認知される道が開かれていたといえる。

二、婚姻の手続き

⑪ 縁組・結納・婚礼・里披（膝直）

婚姻の手続きについては、宗武と斉匡の本妻二人の事例から基本事項を押さえておく。

まず、宗武の本妻となる近衛久子は、享保六年（一七二一）九月十五日に京都に誕生、同十八年十三歳で江戸に下り、江戸城二の丸に入った。こは六代將軍徳川家宣の本妻天英院（近衛熙子）が暮らしており、天英院付の秀小路が迎えるの使者となった。翌十九年に天英院（一位様）から縁組が申し入れられ、享保二十年二月二十八日に十五歳で結納、同年七月十二日に手当米五百俵・金三千両、外に二百俵が渡され、同年十一月二十五日にさらに將軍から守刀・壺・伽羅などの進物が贈られ、十二月十八日に婚礼となった。以後は「御簾中様」と称えられた。

齊匡の本妻となる裕宮貞子は、天明二年（一七八二）に京都で生まれた。寛政五年（一七九三）十二月十六日に十二歳で縁組が決まり、二年後の同七年に京都を発ち、江戸に下向し、十一月十三日に江戸城本丸に入った。將軍付筆頭老女の常磐井と表使の沢田が迎えの使者となったので、本丸大奥に入ったとわかる。十一月十八日に田安邸に引移り、同月二十一日に結納、同月二十七日に婚礼となった。なお、翌年正月十五日に膝直（嫁入り後の初里帰り）で本丸に入った。「江戸幕府日記」にはその旨の記事はないが、本丸大奥に入ったと推察される。なお、齊匡の記事に、寛政七年二月十五日に婚礼手当金三千両を拝領したとある。裕宮も婚礼後は「御簾中様」と称えられた。

このように縁組↓引移り↓結納↓婚礼↓里披（膝直、婚礼後の最初の里帰り）という手続きが進められた。以下、娘の場合も手続きは同様であったが、引移りが結納後となる場合があった。婚礼日が決まると將軍より五千両が支度金として渡されたが、田安德川家からさらに拝借金を願う場合もあった。

宗武嫡出長女誠は、宝暦元年（一七五一）十二月八日に十一歳で松平陸奥守宗村の惣領藤次郎（重村）への縁組が本丸老女瀧津より伝えられ、十二月十日に西の丸（世嗣家治）に伺ったところ許可がえられ、「勝手次第取合」ようにと伝えられ、翌二年三月一日に藤次郎との縁組が正式に命じられ、上使本多伯耆守正珍・松平右近将監武元が派遣された。四月二十三日に宗村が田安邸を訪れた。同五年十一月十九日に結納、三年後の宝暦八年九月六日に翌年九月に婚礼と定まった。この時、金五千両を將軍家より拝領したが、翌九年五月十二日に誠が没したため、成婚には至らなかった。

庶出三女淑は、宝暦十二年に十九歳で縁組の内伺が済み、同年九月二十七日に松平信濃守（鍋島重茂）と縁組が決まり、上使酒井左衛門尉忠寄・松平右京大夫輝高が派遣され、十二月十五日に金五千両が贈られ、十二月二十九日に結納、翌年正月二十三日に婚礼、正月二十九日に里披、五月十五日に婚礼後の初登城となった。嫡出長女と異なる点は、田安德川家の

方から事前に内伺をしている点である。ただし、これは四女以下も同様である。

嫡出四女貞は、明和四年（一七六七）五月十六日に十七歳で縁組内伺が済み、同年五月二十三日に松平相模守（池田重寛）と縁組が許され、上使松平右近将監武元・松平周防守康福が派遣された。七月八日には金五千両を拝領し、さらに五千両を拝借した。翌明和五年二月七日に婚礼、二月十三日に膝直となった。

嫡出五女節は、宝暦十年（一七六〇）十月十三日に五歳で縁組の内伺を済ませ、翌十一年六月四日に六歳で松平岩之丞（毛利治元）との縁組が許され、上使秋元但馬守涼朝・井上河内守利容が派遣された。婚礼は十年後の明和八年（一七七二）十六歳の時となり、十一月二十八日に金五千両を贈られ、十二月七日に結納、十二月十八日に入興・婚礼、十二月二十三日に里披となった。

庶出六女脩の場合は、宝暦十年四月三日に五歳で表向への弘めとなり、同十三年七月一日に八歳で本妻の養いとなり、席順が弟の豊丸（定国）の上と定まった。明和四年八月四日に十二歳で酒井左衛門尉忠徳と縁組し、上使松平右京大夫輝高・松平周防守康徳が派遣された。『江戸幕府日記』明和四年八月四日条には次のようにある。

御使 松平右京大夫・松平周防守

徳川右衛門督殿

脩姫

右御願之通御息女酒井左衛門尉江被 仰出候付被遣之、

酒井左衛門尉

右者右衛門督殿御息女縁組被 仰付之旨於御白書院縁頼老中列座伊予守

申渡之、

履歴に内伺の記事はないが、脩の場合も内伺の後に願書が出され、正式の縁組が命じられたと考えられる。

婚礼は六年後の安永二年（一七七三）十八歳の時で、八月十八日に金五千両を拝領し、八月二十五日に山王社に参詣し、九月十八日に結納、

表 4 婚礼年齢一覧

	人物	年齢
1	宗武妻	15
2	宗武1	18
3	宗武3	20
4	宗武4	18
5	宗武5	16
6	宗武6	18
7	宗武7	23
8	宗武8	21
9	斉匡妻	14
10	斉匡1	20
11	斉匡4	15
12	斉匡7	20
13	斉匡8	22
14	斉匡9	18
15	斉匡14	11
16	斉匡15	25
17	斉匡16	27
18	斉匡19	20
	平均年齢	19

註) 父親名に続く 1～19は出生順

十一月二十五日に引移り、十二月一日に婚礼、十二月七日に里披となった。斉匡の娘も同様だが、嫡出七女の猶の場合をみておこう。文化十年（一八一三）十二月二十五日に七歳で將軍徳川家斉十三男の要之丞（斉莊）と縁組が決まり、田安德川家の家付の娘となる。そこで、席順は嫡出長女近の次、庶出四女鎌の上位に置かれた（次女・三女は早世）。文政九年（一八二六）二月十一日結納、二月十八日婚礼、天保七年（一八三六）八月二十一日に斉莊が田安德川家の家督を継ぐのに連動して、以後は「御簾中様」と称えられた。

このように本妻の養いとなれば嫡庶で婚礼に差はほとんどなかったが、家督継承に関わる場合には嫡出女子が優先され、庶出の姉の上位に置かれた点は押さえておく必要があるだろう。

表 4 には、成婚年齢を示した。平均は十九歳となっているが、斉匡庶出十五女千重・同十六女純は二十五歳を超えている。また、斉匡庶出八女鎌のように、六歳で縁組が決まりながら、実際の婚礼は二十二歳まで延引した例もある。なお、成人した娘で未婚となった事例や離婚となった事例は確認できない。

三、妻となつてから死ぬまで

⑫袖留

女性が成人した時に、振袖を普通の袖丈に縮める儀式である。十九歳から二十六歳と幅がある。誠は婚礼前の十九歳で没したため、袖留はなかった。宗武嫡出五女節は二十二歳で妊娠し、五か月を迎えた安永七年（一七七八）正月二十三日に着帯、その四日後の正月二十七日に袖留となった。宗武庶出八女定は、天明八年（一七八八）二月二十三日に袖留と着帯を同時に行った（二十二歳）。斉匡本妻の裕宮貞子も、寛政十二年（一八〇〇）正月二十三日に袖留と着帯を同時に行った（十九歳）。つまり、初妊娠を機に袖留となる例が多い。

最高齢は、斉匡庶出十六女純の三十一歳である。^⑬純は、四歳で麻疹を済ませ、五歳で丈夫屈が提出され、斉匡本妻の養いとなった。七歳で紐解、十四歳で鉄漿初めとなったが、なかなか婚礼相手がみつからず、二十六歳で柳川立花家十二代当主となる立花鑑寛と縁組が決まり、翌年二十七歳での婚儀となった。婚礼も遅かったが、鑑寛との間に子はいないことから袖留も延引したようで、三十一歳での袖留となった。

⑬着帯・出産・枕直

着帯は女性が懐妊して五か月目に、胎児を安定させるために腹帯を締める祝儀である。宗武本妻の近衛久子は、元文五年（一七四〇）四月十九日に二十歳で袖留となったが、その三日後に流産となり、着帯の祝儀とはならなかった。その後は、二十一歳、二十三歳、二十五歳、二十七歳、三十一歳、三十三歳、三十六歳で着帯、いずれも無事に出産となった。出産後、二十一日目に枕直（平常の起居状態に復す祝儀）がある。

斉匡本妻の裕宮貞子は、寛政七年（一七九五）十一月二十七日に十四歳で婚礼となり、十九歳の寛政十二年正月二十三日に袖留・着帯となり、同年五月二十一日に長女近を出産した。その後、二十二歳、二十六歳で娘二人を出産し、二十一日目に枕直があった。

なお、庶出子が生まれる場合に、本妻がどのようにかかわるのかは今後の検討課題だが、⑩で述べたように、出生後に庶出子を養い、嫡母としての役割を果たすことは、本妻の重要な役割だった。

⑭ 隠居

近衛久子は、夫の宗武が明和八年（一七七二）六月四日に五十七歳で没すると、七日後の六月十一日に五十一歳で出家し、宝蓮院を号した。安永九年（一七八〇）十一月十二日には、六十賀の祝儀があった。

裕宮貞子は、文政八年（一八二五）九月二十九日に四十四歳で没した。夫の斉匡は嘉永元年（一八四八）五月晦日に七十歳で没するので、隠居するには至らなかった。

斉匡嫡出七女猶は、夫斉荘が弘化二年（一八四五）七月二十一日に三十七歳で没すると、即日、貞慎院と名を改め（三十九歳）、明治五年（一八七二）二月二十二日に六十六歳で没した。

この他、判明する事例では、宗武庶出三女淑が、夫の死により明和七年（一七七〇）閏六月十日に二十七歳で円諦院と名を改めたが、文化三年（一八〇六）七月二十七日に六十三歳で剃髪し、同十二年九月二十六日に七十二歳で没した。宗武嫡出五女節は、寛政三年（一七九二）六月二十一日に夫の死により、三十六歳で邦媛院と名を改め、文化二年（一八〇五）九月二十七日に五十賀の祝儀があり、同十二年六月四日に六十歳で没した。宗武庶出六女脩は、夫の死により文化九年九月二十五日に五十七歳で仙寿院と改め、文政三年（一八二〇）正月八日に六十四歳で没した。斉匡庶出十五女千重は、夫の死により弘化四年（一八四七）十一月二十八日に二十七歳で永寿院と改め、万延元年（一八六〇）正月七日に四十歳で没した。いずれも夫の死により名を改め、法号を名乗るようになった。その前にも諱（実名）を変えることがあったが、何を契機に名を変えるのかというはつきりとした理由は、「諸家系譜」の記事からはわからなかった。なお、夫の死後に再婚した者はいない。

⑮ 登城

田安德川家の本妻は、江戸城本丸大奥に登城資格があった。娘たちの誕生後の本丸登城に同行したかどうかは不明だが、近衛久子は安永六年（一七七七）、同八年、天明三年（一七八三）に江戸城本丸奥の御能見物に養女の定（宗武庶出九女）を同道して登城した。安永六年十二月に田安邸が焼失した際には、定とともに本丸に入った。

裕宮貞子の場合は、本丸から田安德川家に嫁ぎ、里披も本丸で行った。寛政九年（一七九七）十二月五日、同十一年十月十五日、享和元年（一八〇二）三月九日の三回、「不時御登城」の記録がある。とすれば、定例の登城があったはずであり、少なくとも年頭は本丸大奥に登城していたと推定される。

⑯ 参詣

婚姻後は、増上寺や寛永寺への参詣がみられる。宗武嫡出五女節は、毛利家に十六歳で嫁いだのち、安永六年（一七七七）五月十一日に二十二歳で山王参詣、同年十月四日に上野寛永寺の有徳院廟・心観院廟へ参詣した。江戸を出て日光や伊勢等に出向いた記事はない。

⑰ 湯治

宗武嫡出五女節は、四十五歳になった寛政十二年（一八〇〇）三月五日に熱海湯治に出かけ、四月十四日に帰ってきた。一か月以上も滞在していたことになる。湯治の記事はこの一例のみである。

⑱ 葬地

早世した娘は、上野凌雲院に葬られた。嫁いだ娘はその限りではない。

おわりに

将軍家連枝として将軍の家族の扱いであった田安德川家の年中行事では、将軍家との関係が重要な要件となった点が特徴的であり、他の大名家

とは異なる点である。ただし、その点を除けば、近世後期の大名家の女性の人生儀礼について、一般的な傾向値を示すことができたのではないかと考える。田安德川家の娘は、江戸で生まれて育ち、江戸幕府が瓦解するまでは、ほとんどを江戸で過ごし、近世後期の武家の女性に一般的にみられる人生儀礼を経て、その生涯を終えたといえよう。

そのなかで、田安德川家の二人の妻は京都から招かれた。宗武の本妻となる近衛久子（近衛家久の次女）は、天英院（六代将軍徳川家宣の本妻、近衛基熙の長女）がテコ入れして京都から呼び寄せた。久子は、天英院にとつて甥（家久）の娘という関係になる。田安德川斉匡に京都から迎えた裕宮貞子は、母が久子の兄内前の娘という関係にあった。⁽¹⁷⁾ 田安德川家と近衛家との縁戚関係が続けられたことも、田安德川家の特徴として押さえておくべき点といえる。とくに、久子は夫の宗武が明和八年（一七七二）に死去し、遺領を継いだ治察が安永三年（一七七四）に二十二歳で死去すると、自身が没する天明六年（一七八六）までの十年以上にわたり、男性当主不在の田安德川家を守り続けた。その点でも、近衛家出身の久子は、田安德川家にとって要となる人物であったと位置づけられる。

久子の死後は、一橋徳川治済五男の斉匡が田安德川家を復興する。本妻となった裕宮貞子は嫡出女子三人を出産し、多くの庶出子の嫡母としての役割を果たした。斉匡の家督は嫡出三女猶の婿養子に将軍家斉十三男の斉荘を迎えて継がせることで、引き続き田安德川家は将軍の家族としての扱いを受けることになった。その一方で、宗武の娘七人、斉匡の娘八人の計十五女が大名家に嫁いでいた。これら田安德川家の娘たちによって築かれた親族ネットワークは、近世後期の武家社会に少なからぬ影響を与えていたことは十分に想定できる。本稿で紹介した田安德川家の各々の女性たちの存在や活動にも、今後はもっと光を当てていく必要があるう。

註

(1) 学習院大学史料館所蔵「三田村鳶魚・小川恭一コレクション」。「諸家系譜」の書誌については、本誌掲載の越坂裕太「『諸家系譜』にみえる申渡と家格変動―松平重昌・重富履歴の分析を通じて―」を

参照のこと。

(2) 松尾美恵子・藤實久美子編『大名の江戸暮らし事典』（柊風社、二〇二一年）。

(3) 年中行事の基本知識は、『精選版日本国語大辞典』（電子辞書版）による。

(4) 『徳川諸家系譜』三（続群書類従完成会）に載せられた「田安德川家系譜」では、宗武の娘の実名は誠・裕・淑・仲（貞）・節・脩・種・定とのみあり、「姫」は付かない。これは、斉匡の娘も同様である。したがって、たとえば「誠姫」と史料に記載された際の「姫」とは、身分格式を表す称号であり、実名ではない点に注意したい。

幕府の正式記録である「江戸幕府日記」（国立公文書館蔵）でも「誠姫」とあるように、田安德川家の娘の正式の称号は「姫」であり、「姫君」は用いない。というのも、宗武庶出七女種が将軍家に養女に迎えられ、本丸に入った後は、「種姫」から「種姫君」へ称号を変更した。つまり、「姫」と「姫君」の格差に留意することは、武家の女性を論じる際の重要な視点となることへの注意を促したい。史料上で家臣たちが付度して「姫」を「姫君」と記すことがあったとしても、右の格式差を正しく理解して分析する必要がある。また逆に、大名家に生まれた庶出の娘で嫡母の養いとなる前には、「姫」と呼ばない事例もみられる（拙著『近世武家社会の奥向構造―江戸城・大名武家屋敷の女性と職制―』吉川弘文館、二〇一八年、一二七頁）。よって、女性名に安易に「姫」を付けて論述する傾向は、学術研究においては顧みるべきと考える。

(5) 女中名は「おとや」。宝暦六年（一七五六）九月に御年寄格、明和八年（一七七二）に宗武が没すると、名を香詮院と改め、天明七年（一七八七）十一月十一日に「御殿内殿付」、寛政五年（一七九三）九月朔日に「大奥向様付」の待遇を受け、文化九年（一八一二）十二月四日に没し、凌雲院に葬られた。

(6) 毛利兵橋大江元教の娘で、女中名は「御数」。

(7) 林小右衛門養女。

(8) この場合の名が、実名(誠・近)のみなのか、「誠姫」「近姫」のように「姫」号もあわせて拝領するのは明記されていないが、註4で述べたように、「田安德川家記系譜」では誠や近には他の娘と同様に「姫」が付けられておらず、実名は誠・近だったとみなされる点、また、次女以下の「御名」を拝領していない娘たちが、「江戸幕府日記」において「姫」号を用いて公称されている点などに鑑みれば、田安德川家では將軍に願ひ出て許可を得ることなく、嫡出および嫡出の扱いとなった娘には「姫」号を名乗らせることができたと考えておきたい。

(9) 『寛政重修諸家譜』巻千四百十五。

(10) 『寛政重修諸家譜』巻七十四。

(11) これは初登城のみを記し、以後は記録されていない可能性もあるが、本人の登城に際しては大奥女中への下され物をはじめとして多大の出費が伴うので、頻繁の登城は差し控えられた可能性もある。「諸家系譜」からは判明しないため、今後の課題としたい。なお、「姫君」の場合は、本人のたびたびの登城が確認でき(「江戸幕府日記」「黒田家譜」等)、後述のように田安家本妻は「不時御登城」をしている。天英院付老女秀小路の養女とある(『寛政重修諸家譜』巻千三百十)。

(12) 徳川家光次男綱重の事例だが、内密の男子が早世した際に、忌中の間は將軍への機嫌伺いの登城などを遠慮した方がよいかと確認すると、内密であれば通常の礼をするようにとの指示を受けた(拙著『大奥を創った女たち』吉川弘文館、二〇二二年、一三一頁)。よって、庶出子の出生を届け出ない理由には、産穢や死穢によって儀礼上の弊害が出ることや祝儀・不祝儀などの贈答事が生じるのを避けることにあった。なお、服忌令では、産穢は父七日、母三十五日と定められており(『御触書寛保集成』九五〇号)、実祖父の産穢は規定されていない。治済の登城差控えがわざわざ記録されたのは、規定上

にない対応であったことに因むと捉えておく。

(14) 中田薫によれば、女子の場合にも丈夫届があったが、男子同様に提出は必須ではなかったとする(中田『法制史論集』一、岩波書店、一九二六年、五四七頁)。齊匡の庶出十一女以降の場合は、成長後に丈夫届が出されている。

(15) 国立公文書館蔵「田安德姫様公儀御養女被仰出候用留書拔」「種姫君様御入興之留」。なお、種の婚礼の経緯については、関口すみ子『大江戸の姫さま―ベットから御輿入れまで』(角川選書、二〇〇五年)と吉成香澄「將軍姫君の婚礼の変遷と文化期御守殿入用―尾張藩淑姫御守殿を事例として―」(『学習院史学』四七、二〇〇九年)、種姫の女中については、畑尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』(岩波書店、二〇〇九年)に分析がある。

(16) 純の婚礼については、甲斐未希子「柳川藩立花家にみる武家の婚礼」(中野等編『中近世九州・西国史研究』吉川弘文館、二〇二四年)。なお、本論文で純の格式を「姫君」としている点については修正する必要がある。田安德川家の娘の格式は、一様に「姫」である。

(17) 近藤敏喬『宮廷公家系図集覧』(東京堂出版、一九九四年)。

〔付記〕本稿脱稿後に、山本英貴「大御所時代」の幕藩関係(『荒木裕行・小野将』日本近世史を見通す3 体制危機の到来 近世後期)吉川弘文館、二〇二四年)、清水翔太郎「近世中期における大名家の婚姻と幕府」(『日本史研究』七三八、二〇二四年)を得た。田安德川家の婚姻関係を検討されており、参照されたい。